

世の中はさてもせはしき酒のかんちろりのはかまきたりぬいだり

〔寛政四年武鑑〕松平内藏頭治政○備前岡山時獻上 暑中 御徳利

〔正月揃五〕酒屋の孟趣

京の又六は、我死ば備前の國の土となせ、もしも徳利とならば極樂と辭世せしも殊勝なり、

〔鶉衣前篇下〕名徳利説

つくねんと静なる時、泥塑人のごとしとは、賢徳の姿をほめて、此物にはあらざれども、玄たしめば一團の和氣あた、かに雪の夜あらしも身にまざるは、これがため、たとへにもいふべかりける、まして備前の名産にして、六升ばかりを、とさげば、たとへ八仙の客にはとほしくとも、虎溪の禁足は忘るゝにたりぬべし、なを此物の徳を思ふに、斗樽は座敷に場をとれば、これがたぐひにはいふべからず、あるはちろりといひ、間鍋といひ、前後左右のむつかしみありて、弦によそほひ袴をかけて、實は心のとけざるかたもあるべきに、たゞ此物の口をそらざまになして、なみ居る人の中に出て、いづれに向ふともなく、たれにそむくともなき姿をもそなふなるべし、此ぬしこれに名を呼む事を求む、むかし子猷が竹は、見ぬ日ありともさてやみぬべし、此ぬしのこの物における、一日もなくてはあらざるべく、つねに膝下に召まつはさるれば、かの此君の名の古きを尋て、此童とよばんにかゝ有べき、されば世の近侍の童は、立居に尻のかるきをほむれども、此童の奉公振はたゞいつまでも、いつまで草の根づよく尻の重からむこそ、主人の心には叶ふなるべけれ、

月に雪に花に徳利の四方面

〔堀川後度狂歌集三〕九月九日

神酒の口にさゝれて三方の高きに登るせくの白菊

阿曾備